

広汎性発達障害児に対する食事指導

Eating Training for Child with Pervasive Developmental Disorder

○鈴木崇夫・橘川佳奈

(東京ABA支援の会) (東京ABA支援の会/洗足こども短期大学)

Takao SUZUKI, Kana KISTUKAWA

(Tokyo ABA Support) (Tokyo ABA Support, Senzoku Junior College)

keywords: Pervasive Developmental Disorder, feeding problem, 食事

問題 広汎性発達障害をもつ子どもは、その障害の特性から食行動に問題を示すことが多い。例えば、食べ物の好き嫌いをしめず偏食傾向は、Rastam (2008) によれば感覚的過敏や鈍麻、特に視覚刺激や聴覚刺激に強い影響を受けている。また、食事スキルの未熟さについては、認知的能力が不十分なこと、もともと社会的関心が弱いことから他者をモデルとして学ぶのが困難なこと、食事へのモチベーションが低いことなどが起因とされている (Lukens, 2005)。実際、広汎性発達障害児における食行動の問題とその指導は、栄養面を満たすことを目的にしたものと、正しい食事の仕方を身につけることを目的にしたものとに大別される (小塩・小宮・富安, 1974)。適切な食行動の習得は、保護者の負担を減らすのみならず (小塩ら, 1974)、本人が参加できる社会的場面を増やすことにもなり (Rastam, 2008)、障害児が有意義な生活を送る上で重要である。

目的 東京ABA支援の会では、幼児から小学生までの広汎性発達障害の子どもを対象に、応用行動分析学の理論による個別療育を行っている。子どもによっては、身辺自立のスキルの習得を目標に、食事の指導が組み込まれることもある。本研究では、さまざまなプログラムに先立って、食事指導を集中的に行った事例について報告する。

方法

対象児：Y (7歳、女児) 2歳時に都内病院にて、広汎性発達障害の診断を受け、現在、特別支援学校に在籍。東京ABA支援の会には、6歳11ヶ月の時に来所し、週2回の個別療育を開始した。開始当初、表出言語はほぼなく、稀におもちゃや絵を見て、単語を発することがあった。体調や環境 (天候や音など) の些細な変化で、パニックを起こしやすく、大声で泣く、頭や脚をたたきつけるなどの行為が頻繁に見られた。母親によると、食事中には席をたつて歩き回り、食卓の上に乗ってしまうこともある、また食べ物を触って遊ぶことも多く、食べる時も手掴みで、基本的には、母親が時間をわけて食べさせていた。

設定・道具

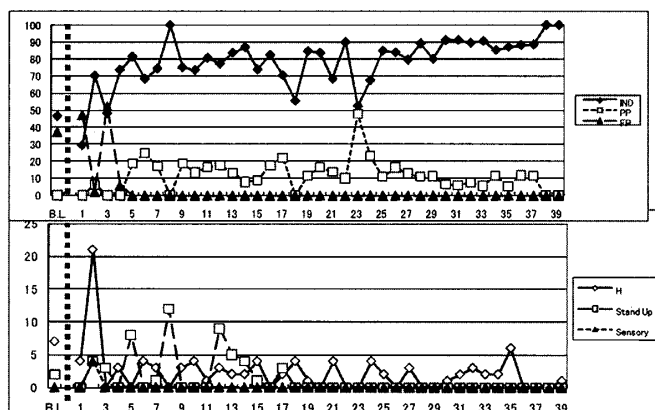
期間：食事指導は2010年8月31日から2011年4月9日の間、計40回の個別セッションで行われた。通常2時間のセッションの最初の約20分間で食事指導をした。またセッションの時間帯は、Yの食欲を考慮して午後に調整した。食事指導中は部屋の角に置かれた小さな机と椅子に座り、セラピストは常にYの横側に座った。食事の内容は、Yが普段好んで食べるものを温めてから用いた。

標的行動としては、食事をする間、立ち上がらずに座り、手ではなくスプーンやフォークの食具を使って自分で食べることとした。

記録方法：食事指導中、Yが食べ物を口に入れた総回数を数え、H (手で食べる)、FP (セラピストがYの手をとって適量の食物を掬い、口まで運ぶ全行程をプロンプト)、PP (食物を掬うから口に運ぶまでを部分的にプロンプト)、IND (プロンプトなし)の頻度を記録し、その割合を計算した。INDが2回の異なるセッションで100%以上になった時、標的行動を習得したとみなすとした。

また椅子から立ち上がろうとした回数、手で食べようとした回数、食べ物を触って遊ぶようとした回数を数えたが、これらの問題行動はその都度、手や体を軽く押さえるなど阻止 (ブロック) した。

結果 指導開始直後からFPは減少傾向を示し、9月18日以降0%を維持した。PPはしばらく20%前後を推移し、徐々に減少した。食事指導39回4月9日には2回連続100%となった。また問題行動については、食事中に席を立つ行動は毎回10回程度が続いたが、10月になると減少し、11月には0回で安定した。手を汁に入れて遊ぶといった行為は9月7日に一度見られただけだった。また手で食べる行為はすぐに減少したが、数回はこぼしたものを拾ったり、嫌いな物を選び分けようとして



手を使う行為がみられた。

考察 今回の標的行動は、課題分析をもとに細分化して学習することも考えられたが、Yの食行動には重篤な問題行動が伴うこと、母親の負担の大きいことを考慮して、早急に成果が得られるように、「きちんと座って、スプーンやフォークを使って自分で食べる」という一連の動きをまとめて指導した。小塩ら (1974) はタイムアウトを用いて食事中に見られる問題行動の修正を試みているが、Yの理解力や行動の傾向を考えると、行動とタイムアウトが結びつかず、パニック状態になったと推測される。今回、身体的なプロンプトで始めたことで、適切な行動を直接的に体験し強化される機会が増え、その結果、不適切な行動を早くから減らすことができたと考えられる。

また療育の初期に、一定の成果を得たことで、Yの療育自体に対する動機づけや意欲にもつながり、その後の療育プログラムの習得に関係していることは誠に意義深い。療育を行うにあたり、子どもやその家族が、療育の成果を早期に実感し、さらなる成長を目指せるよう効果的な方法を模索する必要がある。

引用文献

- Lukens, Colleen Taylor. (2005). Development and validation of an inventory to assess eating and mealtime behavior problems in children with autism. Ohio LINK ETD Center (http://etd.ohiolink.edu/view.cgi?acc_num=osu1127133704)
- 小塩允護・小宮三彌・富安芳和 (1974a). 食事中にあらわれる重度精神遅滞時の反社会的行動の修正 特殊教育学研究 12(2), 21-29.
- (Oshio, C., Komiya, M., & Tomiyasu, Y. (1974). Modifyng antisocial responses of profoundly retarded boys in mealtime. The Japanese Association of Special Education. 12(2), 21-29.)
- Rastam, Maria. (2008). Eating Disturbances in autism spectrum disorders with focus on adolescent and adult years. Clinical Neuropsychiatry. 5(1), 31-42.